

松谷明彦著「高齢化と人口減少の恐ろしさ」巻頭インタビュー、選択、2012年9月号、選択出版、2012年9月1日刊を読む

高齢化と人口減少の恐ろしさ

Q 1 : 少子高齢化に加え人口減少が始まり、危機的状況ではないですか。

A : (1) 従来の認識を改めて抜本的対策をとれば回避できるのだが、昨今の対応では、経済も社会も破綻するだろう。

(2) 人口減少だけなら問題は少ない。

(3) 人口規模が日本の3分の2であるドイツを見ればいい。

(4) 問題は、日本の高齢化が他国に例を見ない異様な速度であることだ。

(5) 日本では、現役世代がリタイア世代を支えるという欧米風のやり方は通用しないという認識がまず必要。

Q 2 : 少子化対策で対応できませんか。

A : (1) それは認識不足の最たる例だ。

(2) 出生率が向上すれば、日本の人口や人口構造が維持できるという考えはナンセンス。

(3) 少子化対策で何とかするのは普通の人口構造の国の場合。日本は戦後、飢餓への転落を恐れて、「産児制限」を行った。

(4) 優生保護法で堕胎を事実上合法化した結果、異常なまでに子供の数が減り、当然この世代が産み出す「次世代」の数も減少した。

(5) 日本の人口構造は、「団塊」と「団塊ジュニア」の2つの山があるのではなく、両世代の間に「谷」があるのだ。

(6) 自国民の人口構造を恣意的に変えた先進国は日本だけ。

(7) 結果、20～39歳の女性は今後も減り、今後50年で3分の1近くまで落ち込む。

(8) 一方で英仏はこの間に、数%増加する。

(9) つまり、「女性が子を産まない」のではなく、「産む女性がいらない」ということに気付くべきだ。

Q 3 : どうすれば破綻シナリオを回避できますか。

A : (1) 現在のビジネスモデルはもはや通用しないという認識が必要。

- (2)戦後の日本は、外国の技術を使って、大量生産したものを薄利多売で外国に捌いてきた。
- (3)これが成功したのは、競合相手が皆無だったからに過ぎない。
- (4)今では韓国はもちろん、中国、インドも同じことを始めているのだから勝てない。
- (5)「品質」についても早晩キャッチアップされるだろうし、既にエレクトロニクス製品ではむしろ遅れているとも言われる。
- (6)現在のビジネスモデルの競争力は量産効果が頼りなので、労働人口が減少すれば、供給力が縮小しコストが上昇、その時点で破綻する。
- (7)日本の労働人口減少は、自動化などによる生産能力向上を上回るスピードで進む。

Q 4 : 外国人労働者を受け入れるという選択肢はないですか。

A : (1)経団連が考えるような、生産力維持のために安い労働力を入れるのは意味がない。

(2)どうやっても、現地よりは高くなる。

(3)また、企業が外国に行っても状況は変わらない。

(4)もう一度言うが、日本が独り勝ちできたのは競合相手がいなかったから。同じ土俵で戦っても、「数年の延命」が関の山だ。

Q 5 : どのような対策がありますか。

A : (1)かつて日本に負けた欧米がやったように、**オリジナルの製品を創り出し、特許や標準で武装して稼ぐしかない。**

(2)そのためには、**世界でもトップレベルの技術者を日本に呼びこまねばならない。**

(3)極東の日本には来たがらなくても、企業ごと受け入れればそこに技術者はついてくる。

(4)日本では、**グローバル化**というと、ほとんどの企業は海外に出ていくことと考えるが、国内を**グローバル化**しなくてはならない。

(5)また、**技術開発**だけでなく、**真に高品質な「ものづくり」**も1つの方向性だ。

(6)その場合、日本が持つ職人の技は他国が追随できない武器となる。

(7)ただし、残された猶予は**5年程度**だろう。

(8)繰り返り広げられている**不毛な議論**を見ていると、座して死を待つしかなさそうだ。

人口問題の第一人者である松谷明彦先生による現状の分析と問題解決策がわかりやすくインタビューの形でまとめられている貴重な論考。世界でのトップレベルの技術者を日本に呼び込むことによる国内のグローバル化こそ、今最もせねばならないことだ。大いに参考にしたい。

－ 2012年10月13日 林 明夫記－